

日風堂

〈高知県立歴史民俗資料館だより〉

第12号 1994年7月1日

近世土佐の職人

高知大学助教授 荻 慎一郎

高知県立歴史民俗資料館の民俗展示には、職人に関するコーナーがあり、興味深く見学しました。私自身これまで近世の鉱山史を研究対象としてきましたので、これに関連して職人についても関心をもっています。また私事です、母方の祖父が箆箆職人であったことも関係していると思います。益や正月に母に連れられ里帰りすると、祖父の側に一緒に寝かされましたが、枕がかわり興奮して朝はやく眼が覚めたものでした。このような時、祖父は家中の誰よりも早く起きていて、いろいろな道具類のある作業場におりました。もともとその頃は既に箆箆はつくっていなかつたようですので、若い頃からの常としての習慣であつたのかもしれない。

近世の土佐の職人については、周知の「憲章簿」の「諸職人日賃定」（享保六年？）が興味深い内容を提示しています。すなわち、①職人はその職業や技能に応じて上中下などの等級がつけられ、各々の日賃銀が藩によって公定されていたこと、②賃金は基本的に「日賃」銀と「扶持米」（一升五合/日）の二本立てであること、③各職人に対しては、その職業と等級などを記した鑑札たる「手札」（職札）が藩から発行され、これに基づき、日賃銀が支払われたこと、④職人の労働時間、藩の御用で雇われた場合、朝は六時までには現場に集まり、終業は日没までとし、もし火急の仕事で夜に働くときは、晚六時から夜半までで一日役とすること、⑤職人は、「屋祢持ち」の場合年間二十五日、「無縁者」では二十日の「国役」を藩に勤めなければならぬこと、等々を規定しています。

藩がこのように賃金を規定したのは、職人は日賃銀を支払われない「国役」以外に、藩の「御用」で雇われる場合があつたからであり、彼らが基本的には「公儀」の「御用」を勤める社会集団として編成され、統制されていたことによるのであります。民間での相対による雇いの場合も上記の規定に準拠させられ、公用の雇用条件が民間での雇用条件を規制する構図がありました。いうまでもなく、民間での相対賃金の高騰が、公用への忌避の事態を生ぜしめるからであります。このような職人支配や統制の枠組みは、おそらく近世初頭からあり、長宗我部氏時代も職人を上中下の技量に区分してその職人賃に等級差をつけています。もっとも近世初頭には賃は米（粃）規定でありました。

ところが、近世後期になりますと、このような職人支配はくずれてきます。職札をもたずに活動する者があらわれ、職札に書かれた以外の隣接職種の営業をしたり、また民間での相対賃金も上昇してきます。また民間での相対雇いでも、公用に準じて日の出（夜明け）には現場に来ていなければならぬのに、九時ごろに現れる者もでてきました。近世初頭の城郭および城下町建設や戦争に備えての公用的需要にかわつて、国民経済の形成とともに新たな需要が高まり、在町や農村で職人になるものが多くなり、職人統制は弛緩していったものと思われれます。既に、近世中期に先述したような法令がでていて、こと自体がその反映でしょう。「国役」も後には停止または軽減化され、貨幣で代わりに納めるようになります。公用の雇いもいろいろと理由をつけて忌避する事例もでてきます。

過年、職人さんがわが家に入入りされ、その時に最近の若い者は使いにくという話をされました。話を聴きな

から、職人社会内部の関係も、かつての親方・弟子の関係意識より、むしろ雇用関係意識のほうが強いとの印象をうけました。時代とともに職人の社会も変化するのでしよう。そういえば、近くの団地でまたたく間に家が建てられる（組立てられる？）様子をみて驚いたことを思い出しました。

企画展

おきな じよう おとこ おんな れい おに
翁・尉・男・女・霊・鬼

—土佐・能面の展開—

7月30日(土)～9月4日(日)
休館日 8月1、8、15、22、29日(毎週月曜)

8月20日(土) 14時～16時

講演会「土佐と能楽」高知県立図書館 森口幸司氏

山内神社宝物資料館、土佐神社などの能面から一〇〇点近くを展示。能面の形態別に展示し、その世界像に迫る!



弱法師

能と能面について

梅野光興

能、そして能にもちいる仮面とはどのようなものなのだろう。

森口幸司氏の「土佐藩能楽雑攷」(『高知の研究』4 清文堂)に、元禄時代の城下の能会で演能頻度の高いものがあげられている。そのなかで二七回上演され三番目に多い「野々宮」のあらずじをみてみよう。

諸国一見の僧(ワキ)が都の名所旧跡をまわり嵯峨野の野の宮を訪れる。里の女(シテ)があらわれ、光源氏が六条御息所をたずねここに訪れたという物語を語る(里の女には深井などの女面を使う)。やがて里の女は自分こそ六条御息所であるとしやべりはじめの。女は御息所の亡霊の化身だったのである。ここで女は一度退場する。僧は御息所を叩いて夜を迎える。すると御息所の霊があらわれ、おのれの妄執を語りながら舞をまう…。

「野の宮」は、旅人が神霊と出会ういわゆる「夢幻能」の典型のひとつである。能面はここでは里の女と亡霊に使われる。男の役者が女(化身と霊)を演じるために女面が用いられる。

能は仮面劇だが、全ての役者が面をつけるわけではない。ふつうの男性の

役は素面で演じる。面を使うのは、老人や女性など役者の年齢や性の異なる人間と、人間ではない存在——神、鬼、幽霊である。

鬼や幽霊、神の仮面は、能面のなかでも特に発達している分野である。これは、能がもともと、神霊の出現を招く宗教儀礼に端を発しているらしいことに関わっている。

霊の言葉を聞くために宗教者は、梓弓を叩いて霊を呼び出したり、夢のなかで亡き人に会ってその心を確かめていた。「夢幻能」という形式自体も、諸国一見の僧などが夢とも幻ともつかぬ状態で霊の姿を見、その想いを聞くという内容で、これは託宣などのドラマ化らしいことが察せられる。能は、おそらくこのような信仰の場に生まれ、やがて娯楽として独立し、洗練され発達したものであろう。

今回展示する中世から近世の能面は、戦国武将や藩主の娯楽のために用いられたもので、優れた名品が多く含まれている。土佐神社奉納の面は残念ながら色は落ちているが、表情がまだ未完成で、能面が信仰の場にあった時代のカオスとエネルギーを残している。山内家の美として完成された能面と比べることで文化の洗練と変容の過程がありありとつかめることと思われる。

II 企画展講演会から II

土佐の古墳の諸問題

高知県立埋蔵文化財センター調査第一係長 山本 哲也

古代の人々は巨大な岩を自然の崇拜の対象としていました。そして古墳の石材としても利用しました。内部の構造について小蓮古墳を例にお話をしましょう。古墳の外観はこんもりとした小山のような盛り土になっています。

その中に石室があります。この古墳は非常に大きな岩を用いて石室の壁としています。石室は羨道と玄室からなっています。玄室は奥の方、遺体を置く場所であれば黄泉の世界です。羨道は玄室への入り口部分にあたります。入り口は非常に狭く、土佐の横穴式石室の特徴でもあります。

三世紀後半から七世紀前半にかけての古墳時代のうち、四世紀を前期、五世紀を中期、六世紀を後期と三時期で分ける考え方があります。そして、古墳時代の前期の古墳をI期II期と分けると、前I期（四世紀前半から中頃まで）の古墳は現在のところ県内では未発見です。

宿毛市平田町の高岡山一号墳は前II期（四世紀中頃から後半まで）の古墳です。一号墳は一辺が一九メートルの方墳の可能性ががあります。埋葬施設は、

石室というより木棺を礎と粘土でつみこんだだけの礎柳構造であったと考えられています。

二号墳は粘土を積み上げて造っており、少し粗雑な感じの埋葬施設です。一・二号墳の礎柳構造の埋葬施設は一般にいう堅穴式石室と表現してよいと思います。一号墳からは筒形銅器が出ており、日本国内で出土している筒形銅器の中では一番小さく、形の類例は全く非常に珍しいもので、どこから伝わったのか非常に興味のあるところだと思います。

土佐の古墳には埴輪はなかったとされてきましたが、高岡山一号墳から埴輪の代わりとして用いられたのではないかと思われる土器が、見つかっています。しかし、古墳主体部の周辺をとり囲むような埴輪的な配置で置かれていた痕跡は認められません。県外では木製品を埴輪として代用する古墳も見つかってきていますので、土佐では焼き物としての埴輪をもつ風習はなくても、木製品、布等で祭りをしてきた可能性もありません。

ところが、土佐山田町の伏原大塚古

墳からは埴輪が出てきました。埴輪は石室のある周辺の墳丘に並べられていたようです。この埴輪は一般的な埴輪とは異なり、円形、三角形の透し孔がありません。県外でもこのような例があるので、透し孔がないから埴輪ではないとはいえませんが、この埴輪は須恵器の工人が製作し、須恵器の窯で焼かれたものです。

土佐にはいつから横穴式石室が取り入れられるようになったかということですが、後I期（六世紀初めから前半まで）の南国市の蒲原山東一号墳、高知市の高間原一号墳がもとも古く、崩れた方形の玄室に短い羨道をもうけた石室という特徴があります。これに続く後II期（六世紀中ごろ）の例は南国市の明見彦山三号墳です。後III期（六世紀後半）は小蓮古墳、新改横走古墳が挙げられます。特徴は玄門部のところに石を立てます。この時から土佐の後期古墳はこれを継承していきます。一つ前の段階の明見彦山三号墳の場合は石を立てるには至らず、横積みにし、玄室と羨道を区画しています。

六世紀の中頃から玄室の長さの非常に長い古墳が造られ、六世紀の後半にかけてその形はさらに発展します。南国市の舟岩一号墳、二号墳、三号墳、小蓮古墳はその例です。後IV期（六世紀末）になると玄室と羨道部の幅が同じ

大きさに近くなります。例として土佐山田町の前行山一号墳が挙げられます。七世紀の前半、後V期の高知市の朝倉古墳は土佐の終末期古墳ですが、平面形は古い時代の型を残しています。

土佐の横穴式石室には二つの型があります。玄室の長さが非常に長くて幅が狭い型と玄室の長さ幅が二対一前後のもので、七世紀の前半までこの二つの型は引き継がれていきます。高知県の西部から東部にかけての古墳の横穴式石室の中でそれぞれの地域の特徴というものはみられず、二つの型のどちらかにあてはまります。石材は異なっていますが、一つの規範に従って同じような型の古墳がつけられます。玄門に仕切石をおいて立石を置くという型がうけつがれ、保守的であるといえます。この型に従っているから土佐の古墳は後進的だということもできませんが、古墳という資料でその地域の社会が復元され、土佐の古墳時代の社会の特質と変遷が理解されるのではないかと思います。

古墳は墓ですが、当時の社会を探る上で超一級の資料です。土佐の古墳を通じて古墳がたくさんつくられた社会の本質を探ることができれば意義のあることと考えます。

古墳は墓ですが、当時の社会を探る上で超一級の資料です。土佐の古墳を通じて古墳がたくさんつくられた社会の本質を探ることができれば意義のあることと考えます。

古墳は墓ですが、当時の社会を探る上で超一級の資料です。土佐の古墳を通じて古墳がたくさんつくられた社会の本質を探ることができれば意義のあることと考えます。

岡本健児 先生



高知新聞に連載したときには、「小中学生の考古学」というテーマで書いてでしょう。子どもにわかるように書くということは非常に難しいんですよ。なるべく易しい表現を心掛けたのがね。今回歴史民俗資料館で出すことになり、それから離れて一般向けに書き改めました。新聞の連載でも、小中学生よりも、むしろ一般の方に評判がよかったです。歴史を研究されている方などよく読まれていたようです。

今回は、高知県の考古学界を多年に渡ってリードされてきた岡本先生にご登場いただき、先頃当館が発行したご著書『ものがたり考古学』のことや、高知県の文化財行政へのご意見などをうかがいました。考古学への先生の情熱がひしひしと伝わってくる、知られざるエピソードなどもご披露いただきました。(中村)

——このたび刊行された『ものがたり考古学』についてお聞かせください。

——どういったきっかけで考古学に興味を持たれたのですか？

中学時代は福岡県にいましたが、至るところに遺跡があった。シエパード

を連れての散歩の途中で拾った土器を、古いものだといわれて興味を持ちました。自転車で遺跡を回ったものです。当時の考古遺跡の地名表に出ていない古墳を見つけてね。それほどたくさん遺跡があったのですが、新発見だと有頂天になり、のめり込みました。『考古学雑誌』の講読をはじめたのが昭和十二年、一番最初に読んだのが神道考古学の大場磐雄先生の論文。馬の形をした土製品が絵馬の起源だという内容で面白くてね。そんなわけで國學院へ行ったんです。

そこで、がむしやらに勉強しましたよ。九州で弥生を、東京で縄文を掘って報告を書きました。私は学生時代には、東大生に化けて東大の原田淑人先生の東洋考古学の授業を受けたりしていました。研究を通じて他大学の人の付き合いも多かった。例えば慶応大の学生だった江坂輝彌さんと指扇式土器について共同研究し、若い連中で雑誌を占領しました。ある面恵まれていた。大学時代は考古学一本でしたね。

神道考古学には、やはり興味があったて、宗像神社の許可を得て一〇日間九州の沖ノ島祭祀遺跡の調査をしようと思いました。けれど運悪く、沖ノ島の砲台の点検のために憲兵が同じ船に乗っていた。私は写真機を持っているのを見咎められて、大目玉をくらい一日で

帰されました。それが転機となり、神道考古学から少し離れてしまう。沖ノ島の帰りに、杉原莊介さんによる有名な遠賀川の弥生遺跡の発掘に参加しました。

その後、一番古い弥生文化の研究を続けます。農耕文化の成立を追いかけたのです。縄文最後の土器と弥生の最初の土器の接触。土器がどのように変化したのか。卒論もそれで書きました。

——高知県で取り組まれたご研究についてお聞かせください。

昭和一八年に高知に來まして、窪川農業学校に勤務したのですが、すぐに召集が來ました。そして、ビルマ(ミャンマー)に行かされました。雲南と国境も越えました。一月三日に総攻撃をかけ、一個中隊が全滅しましたが、なんとか生き残りました。終戦後一年ビルマにおいて、爆撃跡の穴から出た石斧や土器を背囊にいっぱい拾っていましたよ。しかし、帰国のときに検問にかかると脅されて、泣く泣く埋めてきました。ただ雲南やビルマの人々の生活を見たのは幸いでした。二人の女性が銅鐸の絵と同じ様に豎杵で米をついているなど、弥生文化を眼前にするようで感激で一杯でした。

昭和三〇年代前半まで、私が取り組

んだ研究は弥生文化が主体でした。入田遺跡も、田村遺跡群発掘の発端となった西見当遺跡の調査も最古の弥生文化を探る仕事の一つです。入田も土器からはじまりましたが、田村でも、明治大学の杉原莊介さんのところへ内地留学した折に、杉原さんから河出書房の『日本考古学講座』に書かせてもらった文を南国市の浜田春水さんが読まれ、西見当で拾った土器片を持って来られたのがきっかけでした。入田と田村の弥生前期の遺跡は遺跡の立地の在り方に共通点がありますね。

私は考古学における文化の転換期に興味があります。弥生前期の研究が一段落し、昭和三六年頃から洞穴遺跡を追いかけました。縄文から弥生への移行を見てきて、今度は旧石器から縄文に移る過渡期を追いかけようというのです。その中で一番大きい仕事が愛媛県の上黒岩陰遺跡の発掘でした。

昭和四二年に高知女子大学に入りましたが、奈良国立文化財研究所にも呼ばれていたんですよ。迷いましたが、女子大の方が魅力があった(笑)。役人になるのは好きませんしね。九州の某私立大学の誘いもお断りした。高知から去り難かったのです。

大学を出てから、コツコツ勉強してきたのですが、大きな研究のきっかけをつくってくれたのは、県の教育委員

会だと思ってるんです。私を含めて、横川末吉さんなどの研究者を県教委が育てた。内地留学もさせ、また研究に便宜を与えた面が多分にあった。なお、学会で東京によく行きましたがね。どこで泊まってるの?と聞かれると、藩邸に泊まってると答えました(笑)。東京事務所宿泊所のこと。自分を藩の学者と自負していました。

——高知県で研究する魅力は、どういったことだとお考えですか?

高知に住んでいると、友人が気の毒がるんですよ。研究に不便だろうから、新幹線の沿線に出て来いというんです。けれど私は、高知は古いもの、忘れられたものが残っている、そのよさがあまり理解されていないと思うのです。瀬戸内と高知を比較したことがあります。確かに高知は遅れている。「海

国」だといけれど、高知の海の利用は新しいんですよ。高知は文化の終着駅で、入った文化の行き場がない。だから、古い文化が堆積している。開発も他所と比べて進まなかった。銅剣にしても環頭大刀にしても残ったことには理由があるのです。そういうところだから、やり方によっては研究の甲斐のある地域だと思う。文化が入ってくるルートも時代によって山からであり

海からであり、それが河川流域に文化の差異が生じた理由のひとつでしょう。——これからは、こういったテーマに取り組まれるのですか?

無理がたたり、昭和五〇年に狭心症で一ヶ月入院しました。医者から鎌を持たれんと言われましたが、それなら口で掘りますと言ったものです。若い人を指導して掘るといこと。田村遺跡群の発掘は顧問として一週間に二日通いました。田村遺跡群が終わった頃には若い人も一本立ちし、口で掘ることもやめないかん。それで掘らない考古学をやろうと、見つけた道が神道考古学。振り出しにもどったわけです。神社のご神体や宝物などの研究を自分の仕事としてやっついこうと思っただけです。

掘る考古学のことを私が書くのは今回の本が最後じゃないかな。今後は若い人達にお任せして、見守っていきたいと思っています。あとは文化財の保護に努力したい。昭和二七年から県文化財の委員を続けていますからね。

——高知県の文化財行政についてご意見をお聞かせください。

終戦前後、全国的に名の売れた方々

が東京から帰って来ました。日本刀の浜田晃僖さんや建築の上田虎介さん、それに加え、平尾道雄さん、横川末吉さん。その方たちが県文化財の委員として活躍なさった。しかし、最近では専門分野によっては、陰りがでてきたようです。特に歴史的な文化財関係では委員の高齢化と若手が少ないことに危惧を感じます。これまでは高知に帰って来た方や大学や高校の先生が委員をしてこられたが、今の状況では特に高校からは研究者は出てこないのではないかと思います。また、大学の先生方も高知に根をおろした研究をなさる方が少なくなると思います。このような状況を補うものは歴史の学芸員ではないかと思えます。そのためにも、歴史の学芸員を増やさなければなりません。かつて県にいた池田真澄さんという人は、定年まで文化財一筋で通した人でした。池田さんが文化財担当者会に出席するときには、鋭い質問をされるので、文化庁の役人が特に勉強して会に備えたと聞いています。それぐらいの識見と専門知識を歴史の学芸員に持つてほしい、歴史では県の歴史の全容がわかり、あわせて文化財の判定のこともなども出来るようになってもらいたい。それが長期的にみて、今後生じかねない県の文化財行政のプランクを救う一つの道だと思えます。

土佐の海の民俗

中村 淳子

老いた漁師は海を見ていた。

その人に出逢ったのは、須崎市野見の海辺を歩いていたときのことだ。かつて行われていた網漁や、養殖をやりだしてからのこと、祭りのことなどを、海を見ながらその人は語った。話がひと息つくくと、手を差し出して私に触らせてくれた。ごつくて、堅い手だった。「長いこと櫓を漕いで堅くなった。」と言って、老いた漁師は笑った。

その人たちの生きざまに、その人たちの想いに、どれだけ触れることができるだろうか、と海辺を歩きながら、ぼつりぼつりと私は考える。

海からの視点で、日本文化をとらえ直そうとする動きが、近年、全国的に活発になっている。「海と列島文化」シリーズなどが刊行され、農民に偏って描かれてきた従来の歴史像が、漁民や商人の活動にも目が向けられた上で修正されつつある。

土佐においても岡林正十郎氏の『高知県定置網漁業史』や、田辺寿男氏の『海辺―高知の民俗写真1―』など、漁撈技術や海の信仰に関する研究の成

果が、次々と刊行されるといふ喜ばしい状況にある。これまで「海国土佐」といわれつつも、必ずしも明瞭な姿を見せてこなかった土佐の海の民俗が、徐々に姿を現してきた。

しかし、その一方で、土佐の地域性の一端をあきらかにし得る重要な資料であると考えられるにもかかわらず、漁撈用具や漁撈史料などの、土佐の海の資料は思いのほか収集されておらず、現在に残されたものは非常に少ないという状況が厳然として在る。

少ないながらもまとまった形で、土佐の海の資料を後の人びとに手渡すための収集活動は、まさにここ数年が勝負であるように思われる。そこで、当館では、こうした資料の持つ意義や置かれている状況をふまえて、館として取り組む長期的な調査研究のテーマのひとつに、昨年度から、漁撈習俗を挙げていく。

土佐の地域性は、土佐を含めた広い範囲に視野を向けることで見えてくると思う。例えば、黒潮が沖を流れる地域に共通する文化要素などを見出し、文化の伝播の道筋や文化圏を描き出す

ことによって、時間軸と空間軸の中に土佐を、あるいはそれぞれの集落を位置付けていくことが可能であろう。海の道を通じての文化の交流は、土佐において数多く見いだされる。例えば鯨漁や鯨節などの技術が、紀州や長州、九州などからもたらされ、土佐もまた各地に技術をもたらした。それにともなつて、鯨歌などの民謡も伝播している。さまざまな祭りや行事、伝承を比較することも、土佐の地域性を明らかにする有効な手だてである。

また、漁撈技術の具体的な記録についてもできるだけ蓄積していく方針である。既に失われた技術が多いこと、個人によって異なる技術があること、対象とできる技術が限られることなど、これを記録することの困難さや限界は当然あるとしても、比較可能なデータが必要である。漁撈用具を広域で比較する調査を通して、明らかにしておくものも多いと思われる。漁撈用具などの民俗資料は、ひとつの種類につき一点づつ収集すればいいという類のものではない。例えば土佐の海の民俗についてモノを通して何かを語ろうとするならば、関連する資料を体系的に収集し、多くの資料を比較する必要がある。

いまひとつの方向として、ひとつの集落、あるいは個人の、漁撈習俗の微

細な世界へ分け入る道がある。これについては、社会や信仰も含めて、海の人の営みというものになるだけ接近したいと思う。いきいきとした暮らしの姿をこそ、民俗誌として記述していきたい。

それとともに、漁撈技術や海の祭りなどの映像記録を行いつつある。その場に身を置いて行う映像記録は、その場の状況をストレートに伝え得るものであるが、撮影者の感動が、おのずと対象を決定もし、ある面、映像を規定すると実感している。今年の正月に当館資料調査員の福吉要吉氏のご尽力を得て、大月町古満目の水浴びせを撮影させていただいたが、海の男たちの勇壮な船歌に、その人たちの心情の発露をかいま見る思いがして、心の琴線が震えたものである。客観的に比較可能なデータを蓄積していくことは無論重要であるが、こうした部分もまた、そぎ落としてはならない真実だと思った。

土佐の海の民俗について、私自身は漕ぎ出したばかりで、まだ語り得べき言葉を持たない。時の流れの中に、ともしれば埋もれ、忘れ去られそうな人びとの生きざまや想いに、なんとか接近し、記録・収集する作業を通して、言葉を紡いでいきたいと考えている。

「憑霊信仰論—妖怪研究の試み」

小松和彦著

(講談社学術文庫 九八〇円)

文化人類学者・小松和彦氏による、妖怪をめぐる論文集である。氏は妖怪研究の第一人者として知られているが、本書はその出発点となった著作である(元版は一九八二年刊。今回は増補された八四年刊のありな書房版による)。

この本のなかでは、憑きもの、呪い、式神、護法、山姥、付喪神などの妖怪や神霊が論じられている。憑きものについては、これまでも民俗学的な立場から研究が進んでいたが、「犬神憑き」「狐憑き」など狭義の憑きものに限られていた。だが「ついでに」「ついでにない」という言葉を私たちが普段用いるように、「つく」という言葉はもっと広い意味をもっている。憑きものとされていなかった

た座敷童子や山姥も広義の憑きものなのである。このような視点からのとらえなおしは、従来の見方にとだわる私たちに、まさに目からウロコの落ちるような思いであった。この本には同様に、これまでの学説の批判と再構成が多く、民俗社会とそこに棲む妖怪たちの姿がよりダイナミックなものとして再生していった。そして、それは文化人類学、民俗学、歴史学、国文学などの領域を越えて学問が交感する営みでもあったのである。

また、小松氏は物部村のいざなぎ流についても綿密な調査を行なっており、本書もその成果を生かしている。全国版の文庫によるいざなぎ流入門としても初めての本である。

(梅野)

歴史散歩

総社

(南国市国分)

第十二回

四国霊場八十八ヶ所第二九番札所、国分寺の仁王門前を少し西に進み北を向くと鳥居が見える。ここは総社である。多くの参拝客が訪れる国分寺に比べ、ここは静かなたたずまいである。

岡山県には総社市という市がある。この町は備中総社宮の門前町として栄えた。総社というのは漢字の意味するように、いくつかの神社を一ヶ所にまとめて祀っている神社のことである。

国司が土佐を治めていた時代、国司の任務のひとつに国内の代表的な神社(式内社)を参拝することがあった。式内社といっても二一社あり、安芸郡に三、香美郡に四、長岡郡に五、土佐郡に五、吾川郡に一、幡多郡に三というように、広範囲にわたっており、それらを全て巡拝することは大変な仕事であった。そこで、国府の所在地に近いところにそれらの神社を勧請した。また一説では、総社は一國の神事を統括するところであるので、国衙神事の執行にあたり管内諸神の合祀がはかられた、という。

『南路志』には、「惣社大明神三社」について「土佐國中之惣社也。社地、先年者國分村之東ノ端ニ有、寛文九西年國分寺惣構之内江引遷。…」とあり、元は、国府村と国分寺村の境、現在の県道後免領石線のすぐ西側の字「ソウシャアト」にあり、寛文九(一六六九)年に元国分



総社

寺境内の現在地へ移されたことがわかる。さらに続いて、「當社之鰐口、安喜郡中山郷別所村北寺薬師堂ニ有。(中略)土州惣社大明神 大願主衛門尉真長敬白 康暦元年八月十五日」とあり、康暦元(一三七九)年には総社が存在していたことが確認できる。

総社の起りについては、国司が任国へ行かず、現地の在庁官人に地方の政治を任せるようになった頃からだといえる。それは、平安時代後期の地方の政治が乱れはじめた時期に一致するようである。

へ土佐電鉄バス領石・植田行き国分寺通下車徒歩一〇分

(曾我満子)



歴民スポット②

記念スタンプ登場!



来館者の熱望に応え、ついに三年目にしてスタンプの登場です。図柄は歴民の外観、環頭大刀(複製)の把頭、一領具足くんの三点。結構人気があつて子どもたちの人だかりができています。あなたも記念にいかがですか?

(梅野)

7～10月の催し物

〔企画展〕

7.30～9.4	翁・尉・男・女・霊・鬼 —土佐・能面の展開—	山内神社宝物資料館収蔵の能面を中心に、土佐神社などの能面を加えて能面の形成史をたどる。
10.15～11.23	四国の戦国群像 —元親の時代—	四国の戦国時代にスポットをあてた初の大型企画展。長宗我部元親をはじめとする戦国武将たちの遺品を展示する。

〔講演会〕 (午後2時～4時。聴講無料。葉書でお申込み下さい。定員100名になり次第締切)

8.20(土)	土佐と能楽	森口幸司 先生 (高知県立図書館)
11.5(土)	長宗我部元親と一領具足	下村 效 先生 (國學院栃木短期大学)

〔講座〕 (午後2時～4時。当日受付。聴講無料。定員100名)

9.17(土)	土佐の海の民俗	中村淳子 (当館学芸主事)
---------	---------	---------------

〔子ども歴史教室〕 (当日受付。定員30名)

7.9(土)	服のうつりかわり	AM10時集合。総合展示室を見ながら服の歴史を学ぶ。
8.13(土)	紙芝居「ジョン万次郎」	AM10時半、PM1時半。各1時間程度
9.10(土)	ビデオ映画会	「秀吉と天下の統一」「江戸幕府と大名」AM10時半、PM1時半
10.8(土)	土佐の古代を歩く	AM10時国分寺集合。徒歩で国府周辺をまわります。

月日	出来事
平成六年	
四月二二日	米館記念スタンプ設置
四月二九日	特別企画「坂本竜馬」開幕
五月一四日	企画展講演会
五月二二日	企画展講演会
五月二八日	第一回史跡巡り「上黒岩陰遣跡と山岳寺院」
六月五日	企画展閉幕
六月二一日	子ども歴史教室「れきみん探検」
六月一八日	講座「いざなぎ流と猿楽」

〔歴史館日録〕

立正大学教授/坂詰 秀一

目覚ましい発展を続ける高知県考古学。その最新情報を縦横に駆使し、平易に説いた待望の書。

学界の権威が数万年前から一〇〇年前までの高知県の代表的な遺跡をやさしい語り口で解説する。各府県にこのような本がほしいものだ。

「ものがたり考古学」
—土佐国辺路五十年—
岡本健児 著
(定価二八〇〇円)



新刊！好評発売中

〈ひとこと〉

「竜馬展」にはたくさんの方々から御来館頂き、誠に有難うございました。今後も「能面展」・「戦国展」と続きます。どうかよろしく願います。(下村)

岡本健児先生の『ものがたり考古学—土佐国辺路五十年—』がやっと発行になりました。考古学界の第一人者である国立歴史民俗博物館館長佐原眞先生、立正大学教授坂詰秀一の両先生より推薦文もいただきました。やさしい考古学の本となっています。(岡本)

桜の季節は新聞に出たおかげで大繁昌満車のため入れなかつた方には御迷惑をおかけしました。桜見物の皆さんもゴミをキチンと持ち帰るマナーの良さと、職員一同感心しました。(梅野)

古満目の大敷網漁の船に乗せてもらい、お土産にカマス頂きました。(中村)

平成六年七月一日	編集・発行	高知県立歴史民俗資料館
	〒783南国市岡豊町八幡1099-11	TEL 0888(62)2211
		TEL 0888(62)2211
	FAX 0888(62)2110	
開館時間	午前9時～午後5時	
	(入館は午後4時30分まで)	
休館日	毎週月曜日(祝日及び振替休日にあたる場合は火曜日) 12月28日、1月4日	
入館料	一般・400円/中高校生・150円/小学生・50円	
	団体(20人以上)割引あり	
	(療育手帳・身体障害者(1・2級)手帳所持者とその介護者、高知県長寿手帳所持者は無料。この日、文化の日、勤労感謝の日は小中高生は無料)	
	印刷・川北印刷株式会社	